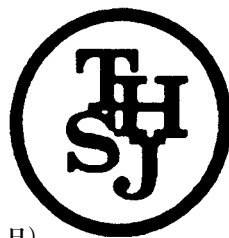


日本ハーディ協会ニュース
NEWS from THE THOMAS HARDY
SOCIETY OF JAPAN



第76号 (2014年9月1日)

発行者 〒162-8601 東京都新宿区神楽坂1-3

東京理科大学1号館1603A研究室内 日本ハーディ協会

編集者 〒606-8588 京都市左京区岩倉木野町137 京都精華大学 北脇徳子



REST by J. Linnell

(提供：那須雅吾氏)

二人の詩人と二つの詩

橋 智子

私事であるが、この4月に大学院博士後期課程に入学し、ロマン派およびヴィクトリア朝詩人の作品を抄読している。その中で感じたことや憶測したことなどを、独断と偏見に基づいて書いてみた。この拙文を巻頭言にさせて頂くことをどうかお許し頂きたい。

さて、授業の中で接する色々な詩人の中で私は「人生の応援歌」とも思える力強く明るい詩を残した Robert Browning (1812-89) に関心を抱いた。同時に、彼の人生や作風が、私が長年親しんできた Thomas Hardy (1840-1928) のそれとは対照的であることにも興味を持った。希望と生きる意欲を奮起させる詩を書いたブラウニングは病氣知らずの意気軒昂たる楽道家であった。運命に弄ばれる人間の悲劇を描いたハーディは悲観主義的で病弱だった。二人の結婚生活もまた対照的であった。夫婦愛を育み続ける努力を惜しまなかったブラウニングと、それを怠ったハーディ。病弱な妻 Elizabeth に向けるブラウニングの情は細やかで深かった。エリザベスは親しい人たちに「ロバートは私の夫、愛人、そして介護人」と語ったという。彼女は夫の胸に

抱かれて安らかに旅立った。ハーディの妻 Emma の孤独死とは対照的な最期であった。両人が妻の死に際して書いた作品にもその違いが明らかだ。ブラウニングの“Prospice”（「前を望め」）とハーディの“Poems of 1912-13”を取り上げてみよう。

1861年6月29日にエリザベスは没した。それから数ヶ月後、悲嘆と絶望から漸く脱却したブラウニングは“Prospice”を書く。彼はエリザベスが神の元にいることを疑わない。そこへ行けば彼女に再会し、また一緒に生きることが出来るのだ。死は、彼にとっては神の国へのパスポートであった。だから彼は死を忌避しない。“Fear Death? . . . / I am nearing the place . . . / Yet the strong man must go.”という表現に、死に際しても恐れることなく一戦を挑む決意が示される。そして最後の数行では妻の霊に“O thou soul of my soul! I shall clasp thee again, / And with God be the rest!”と呼びかける。「我が魂の魂」であるエリザベスの元に「雄々しい男」の姿で現れた詩人は、彼女をしっかりと抱きしめ永遠の愛と命を得て神の国で安らかに生きるのである。

ハーディの最初の妻であったエマは1912年11月27日に死去した。夫婦不和の中、誰にも看取られず孤独な旅立ちであった。彼女の死後、ハーディは残された“Some Recollections”を読み、43年前の熱烈な愛の姿を想起し、改めて妻を哀惜し、自責と悔恨の念にかられた。そして1912年12月から翌年3月までの4ヶ月間にエマにささげる21篇の詩を一気に書いて“Poems of 1912-13”と銘打って世に出した。しかしこの哀しい色合いの詩の中でもハーディは、来世で再会し永遠の愛と命を得ようと妻に呼びかけてはいない。“Rain in a Grave”の中で「春に雛菊の一部になって咲く」、^{ひと}“Beeny Cliff”では「あの女は、今何処かよそにいる」と書いて、植物界、自然界での彼女の復活を匂わせるにとどめている。ハーディは死というものを“His Immortality”で表明しているように、物理的な“first death”と、人々の記憶から完全に消滅する“second death”の二種に分けて捉え、それ以上でも以下でもないと考えた。ブラウニングのように、死後の世界で亡き妻と再会するというようなことは、ハーディの考えには無かったようだ。彼自身も含めエマを知る人らは早晩死を免れず、彼女が“second death”を迎えるのは必定である。それを考えたときハーディは、亡妻に関する一連の詩を残すことによって、せめてこの世に彼女のための永生の場を設えようとしたのだろう。

“Poems of 1912-13”は、冷えきった夫婦関係への悔悛が元となって書かれた詩であった。エマが愛に包まれて旅立っていたらこの珠玉の作品は書かれなかったかもしれない。よってこれは ironical lucky hit であったと言えよう。ハーディは、エマの死後一年かそこらで秘書の Florence と再婚している。読者の哀憐と涙を誘った“Poems of 1912-13”に籠められた悔悛、自責、失った愛への渴望は、夫としての偽りのない真情の吐露だったのか。それとも卓越したハーディの想像力と情緒が、彼の詩人魂を突き動かして書かせた単なる優れた作品にしかすぎないのか。実に mysterious なことではある。

さて mysterious といえばもう一つ、両者に絡んで不思議なことがあるのだ。それはハーディの死の前日と当日に関することである。ハーディは死の前日、フローレンス夫人にブラウニングの“Rabbi Ben Ezra”（「ベン・エズラ師」）を朗読させた。この詩は、スペインで活躍した哲学者・宗教家・天文学者・詩人の高僧ベン・エズラの人生哲学を下敷きにブラウニング自身の思想を述べたもので、宗教詩の傑作と目されている。ブラウニングはベン・エズラの口を借りて青年たちに“Grow old along with me”と語りかけ、神に護られて生きる一生とその最後にやってくる老年時代を礼賛し、死は終焉ではなく来世で新しい命を得て神と共に永生するための儀式であると力強く説く。ハーディは、各連6行から成る32連のこの詩を最後まで傾聴すると少し生気を取り戻し、いつもより安楽な夜を過ごして翌朝には友人から送られた葡萄を嬉しそうに食べ、快方に向かうかに見えたそう。しかし何故ハーディは「ベン・エズラ師」を選んで妻に読ませただろう。神を否定し、老年を容認せず、衰え行く肉体を嫌悪し歎き、神の国での復活・永生を

信じない人であった筈なのに。「ベン・エズラ師」に元気づけられたのは、死期を悟って心境の変化を来したのだろうか。それとも表面は無神論者、運命論者を装いつつ、内面では神への憧憬を抱き、神への帰依を願っていたということなのであろうか。

さて死の当日、ハーディが夫人に読ませたのは「ルバイヤート」の一節であった。11世紀から12世紀にかけてペルシャで活躍した詩人の Omar Khayyám (オマル・ハイヤム) によって書かれた四行詩集のうち75連が英訳されて“The Rubaiyát of Omar Khayyám”(「ルバイヤート」)として1859年に出版されていた。内容は、人間は死により全てが破滅する、明日をも知れぬ儂い命ならば美酒・美食・美女を求めて快楽を貪るのが何よりだと説く刹那的なものである。Darwinの進化論を頂点とする科学思想の進展によって従来からのキリスト教信仰を土台から揺さぶられ打ちのめされた人々がこのデカダンの思想に応化したこともあって、当時大人気を博した作品であった。しかし、名実ともに“strong man”であったブラウニングは、このような退廃思想を唾棄すべきものと考えた。実は彼が「ベン・エズラ師」を書いたのは、この詩に示された虚無的で厭世的な思想に反論するためであったのだ。その因縁の「ルバイヤート」から、ハーディは長い沈黙の後、次の一連だけを選び、繰り返し朗読するようフローレンス夫人に頼むのである。

Oh, Thou, who Man of Baser Earth didst make,
And ev' n with Paradise devise the Snake:
For all the Sin wherewith the Face of Man
Is blacken' d—Man' s forgiveness give— and take!

人間を造り給うた神、蛇を樂園に忍ばせた神よ、人間の原罪を赦し給えと祈願する内容で、他の74連とは全く趣が異なる。この一連だけを何故ハーディは意図的に選び、繰り返し朗読させて傾聴したのか。死に臨んでハーディは、生まれて罪を犯して死ぬ人間の定めを思い、人生の悲哀を感じ、神に罪の赦しを乞うたのだろうか。1928年1月11日の夕刻、ハーディは激しい心臓発作に見舞われて容体が急変し、医師の手当ても空しく夜9時過ぎに逝去した。88年の生涯を終えようとするハーディの死出の旅の葬送曲となったのがこの詩であった。ハーディは何を思いつつ何処へ向かったのか。神の国か。それとも蛇が潜む樂園か。とまれ唯一確言できるのは、ハーディも先妻のエマも、共に彼の作品の中で永生しているということである。

『霸王たち』を翻訳して

押 本 年 眞

『霸王たち』(*The Dynasts*)は、3部19幕133場におよび、一連のナポレオン戦争と呼ばれる戦いのうち、1805年春から1815年6月のワーテルローの戦いで終結するまでの十年間を扱っている。場所もヨーロッパ大陸からイングランドまで展開し、天空から地上を見下ろす部分さえある長大な作品である。登場人物は貴顕より庶民、兵卒までおびただしい数に上る。描かれている場面の多くは史実に基づいているようだ。

ハーディはどのようにして、どんな意図で『霸王たち』を書いたのだろうか。現在、順次刊行されているハーディ全集の中でも、大作である『霸王たち』のⅢ部を分担して翻訳するに際して、この疑問を考え続け、若干調べてみた。

ハーディがナポレオン戦争について最初に目にした刊行物は、『トマス・ハーディの生涯』（井出弘之、清水伊津代他訳）によれば、八歳の頃、家で見つけた挿画の多い祖父が愛読した戦争史の定期刊行物であったとのこと。それはともかく、彼が『霸王たち』執筆に際して参考にしたのは、諸家の注釈や、Samuel Hynesによる Hardy's Library of Napoleonic Literatureの文献表を見ると、『執政と帝国の歴史』（L. A. Thiers著）、『半島と南仏における戦争の歴史 1807-1814』（W.F.P. Napier著）、『回想録』（Meneval著）、『戦争と平和』（Tolstoy著）が主なものである。さらに、ウイーン会議議長も務めたMeternichの『回想録』や英国国会議事録に基づいた場面もある。もちろん、他の多くの史書、伝記に接したであろうことは容易に想像される。

『トマス・ハーディの生涯』には、ハーディは1875年5月に既に、1789年以降のナポレオン相手の戦争をヨーロッパの『イリアス』として書く構想を得たとある。以後三十年近くも、彼はロンドン滞在時には大英博物館などでメモを取り、チェルシー病院で半島戦争やワーテルローの戦いを経験した老兵の話を聴き、ドーセットでも関連資料を調べ続けたとも記されている。

ブリュッセルへの二度の旅行や、イタリアのミラノへ出かけたことも『霸王たち』執筆に生かされている。『霸王たち』と第一詩集『ウェセックス詩集』、第二詩集『過去と現在の詩』は出版時期が重なることもあり、「ロッドの橋」（詩番号74）など、関連性のある詩も多い。

ハーディの家系も『霸王たち』を書かせた要因の一つである。トラファルガー海戦でネルソン提督のもとで、旗艦艦長を務めた Sir Thomas Masterman Hardy はおそらく遠縁である。さらに、「非常招集」（詩番号26）は、ナポレオン襲来の危機の際に、身重の妻への心配と義勇兵の義務に揺れる男の詩だが、ハーディー族にまつわる口碑に基づいている。南イングランドではナポレオン来襲の恐怖はリアリティがあり、多くの逸話が語り継がれた。短編「一八〇四年の言い伝え」は荒唐無稽ではあるが、この恐怖の記憶を反映している。

このように史書、現地への旅行、聞き取りにより『霸王たち』は書かれており、歴史小説と似ている。だが、これは叙事詩劇であって小説ではない。歴史小説は、一人の英雄の野望、活躍、権勢を描いた後、名声の儂さ、己の限界を味わう様を描きがちである。これに比して『霸王たち』、『諸王』などと複数で訳される原題 *The Dynasts* は、ルカによる福音書1章57節を踏まえていて、栄耀栄華を誇ってもやがては高い^{くらゐ}座位から引き下ろされる権勢ある者たちを示唆し、皇帝アレクサンドル、ジョージ三世、皇帝フランツ等も含意している。他の個性の強い登場人物や、目まぐるしいほど広範囲な場面の転換、天空からの精たちの視点も加わり、ナポレオンも霸王たちの一人だという印象が生じてくる。

『霸王たち』を叙事詩劇とした背景には、評論 'The Profitable Reading of Fiction' (1888) にもうかがえるように、1880年代末には、ハーディは小説というジャンルと同時代の大半の批評家、読者に反発と絶望感を持っていたからだろう。散文で書かれる小説は取りつきやすいが、その分、芸術作品として意識されることは少なく、登場人物の片言隻語や作品の一部を作者の価値観と同一視した非難には、ハーディは辟易した。この評論は、小説を読む益よりも、小説に対する否定的な部分が多く、その反面、随所に劇への言及があり叙事詩にも触れている。

若き日に詩人を志しながらも小説家で名を成したハーディは、次第に『ウェセックス詩集』をはじめとした詩集を発表しながら、『霸王たち』三巻を順次世に問う。そこには、一人の自我、主体性を前提とした多くの近代小説のリアリズムに対する違和感があるのだろう。『霸王たち』Ⅲ部一幕一場で、ナポレオンは、「余の分別に反して」、「どうしようもなく課された法則」が「望むと望まないにかかわらず余を動かす」と独り言を言う。この叙事詩劇では、権勢をふるう彼を含んだすべての人物も、歴史も、宇宙を支配するそれ (It) のもとにある。

『霸王たち』は、史書、公文書、取材旅行、聞き取りを基に、いわゆるリアリスティックに書かれた部分と、いかにも文学者の想像力によるこれまたリアルな男女の会話、庶民の暮らしぶりや厭戦気分、幼いローマ王の駄々、戦い直前の自然描写などで大半が書かれている。さらに、全

体のデザインも無いままに編み物を続ける盲目の女性（「まどろみながら仕事をする者」詩番号85参照）に似たそれ（It）と、人間界、さらには地球全体をより広大な宇宙から俯瞰して眺める巨視的な視点（「地球の遺骸のそばで」詩番号89参照）が用いられていることにより、シュールリアリズムに近い要素があることを把握することが、作品理解には肝要であろう。

ハーディと私 その後

永松京子

日本ハーディ協会の創立は1957年であるから、本当に長い歴史があると思う。私は深澤俊先生、鮎澤乗光先生がそれぞれ会長でいらしたときと、玉井暉先生が現会長になられてから少しの間、事務局の仕事をしてきたが、私が最初に事務局に入ったころには会員数は300名を優に超えていたと記憶している。残念ながらその数はかなり減少していったが、それでも現在まで一度も欠かさず年に1回の会報と2回のニュースを発行し続け、しかもその内容が充実したものであることは誇ってよいであろう。もちろん、その背後には歴代の会報とニュースの編集委員のお骨折りがあつたわけで、お忙しいなか、こういう陰の仕事を引き受けられる方々に頭が下がる思いである。

そして、事務局にいて何より印象的だったのは、3人の会長の先生方が協会の運営にどれほどご尽力なさっているかを直接拝見し、学会を長い間存続させるのは本当に大変だとわかったことだった。秋の大会のプログラムひとつをとっても、毎年あれだけの豊富な内容を盛り込むために、会長の先生方が様々なご苦勞をなさっていることがわかるだけに、あらためて感謝したいと思う。幸いなことに、私のあと、坂田薫子先生、次に並木幸充先生、木梨由利先生という有能な方々に事務や会計の仕事をお任せでき、うれしい限りであるが、英文学に逆風が吹く世の中であっても、この協会の歴史を受け継ぐために、自分も今後もいささかでもお役に立ちたいと思っている。

さて、昔『テス』や『ジュード』を初めて読んだ頃は、主人公たちの不幸な人生や作品を覆う暗い雰囲気が目が向きがちであったと思うが、数年前*The Life of Thomas Hardy*の翻訳に加わらせていただいて以来、ハーディのユーモアが気になっている。*Life*と言えば、「私は…風景を美しく描いた絵を見たいとは思わない。なぜなら生の——つまり視覚的な効果としての——現実を見たいとは思わないからだ。私は風景の下に横たわるより深い現実、ときに抽象的想像と呼ばれるものの表現を見たいのだ。」（第14章）といった彼の芸術観を表す部分がよくとり上げられ、私もそのような部分を拾い読みしていたのだが、翻訳を機に全文を読み、まず感じたのはこの自伝のおもしろさだった。彼の人生には、エマとの結婚や、彼の作品に対する世間の無理解などたくさん不幸があつたにちがいないが、この自伝にはその不幸を笑いにしてしまうところがいくつもあり、それが私にはとても魅力的に思われる。

たとえば、『テス』をグラフィック誌に掲載する際、彼はすでに書いていた原稿のなかで、出版社から不適切であると思われそうな部分を削除したり、修正したりしており、後に本としてこの作品を出版するときに、そのような部分をもう一度元に戻している。この削除と修正は「全く単調で骨の折れる」作業で、これを最後に「雑誌のために家族向けの小説を書くのをやめよう」と決心したほどであったと彼は記している。ここまで手を入れてようやく、『テス』が何とか掲載を認められたことはよく知られている。そしてこの切り詰められた形の『テス』について、彼

は、「不適切だという読者からの不平は全くなかったことを述べておこう。ただ一つの例外は、娘たちを家族に持つ一人の紳士だった。彼は天井の血のしみが猥褻だと思った——なぜだかハーディは全く理解できなかった。」(第17章)と述べている。

この紳士の不平は我々から見れば、的外れもいいところであり、このようなレベルの読者を相手にしなければならなかったハーディの苦勞がしのばれる。もちろん、彼はこういうお門違いの文句に対し、怒りや失望を感じたであろう。だが、それでも彼はこの紳士を直接批判するのではなく、「全く理解できなかった」という短い一文でこの一節を終らせている。そのためかえてこの紳士の不満の馬鹿馬鹿しさが読者の印象に残り、笑いを誘うのではないだろうか。自分に降りかかる苦難を面白がっているようなこのような姿勢に、いかにもハーディらしい可笑しさがあろうと思うのである。

おそらくこのような読者の無理解に直面して、彼の心は穏やかではなかったはずである。だからこの一節では、ハーディは正直ではないかもしれない。*Life*についてはハーディを不正直、不正確であると批判する向きもあるようだが、それは一面では間違っていないであろう。しかし、われわれはこれを事実を並べた正確な記録ではなく、彼の人生をもとにした一つの作品として読めばよいのではないだろうか。そうすれば、この自伝には彼の小説などよりもっとハーディらしさが存分に出ていると気づけると思うのである。

近年は昔に比べて、ハーディの文化的研究もずいぶん進んだと思う。ちなみに2013年に出た *Thomas Hardy in Context* (Cambridge University Press) の *The Historical and Cultural Context* の部分を見ると、Hardy and Law、Hardy's London、Hardy and Englishness、Hardy, Militarism and War などを含む15の項目が並んでいる。ハーディの作品は読みつくされているように見えながら、その研究範囲はいろいろと広がっているのが感じられる。自分の研究は遅々として進まないが、それでも世界のハーディ研究の流れに少しでも追いつかなければと思う毎日である。

ハーディと私

杉村 醇子

今年の春、「ハーディと私」と題して原稿を執筆するようというご依頼をいただきました。まだまだ勉強不足の身にもかかわらず、このようなタイトルで執筆するのは恥ずかしい限りですが、ハーディとの出会いとハーディ作品への思い、そしてこれからの研究について、述べさせていただきます。

私は大学時代フランス文学を専攻しておりました。大学ではラシーヌやモリエールなどの古典劇から、ボードレールを中心としたサンボリズムの詩など、学部のカリキュラムに沿って幅広く学びましたが、特にフランス自然主義文学を扱った授業に興味を覚えました。その中でも、エミール・ゾラの世界観に強く惹かれました。時を同じくして、2回生の後期ごろからイギリス文学への関心も目覚め、大学院ではイギリス文学を勉強しようと決心しました。3回生から英文科の大学院入試のための準備を始めましたが、イギリス文学の概要を理解する必要があると感じ、英文学史から勉強を開始しました。その際、英文学史を扱った多くの書籍の中で、ハーディはチャールズ・ディケンズと並ぶヴィクトリア朝小説の大家として取り上げられていました。当時、『ダーバヴィル家のテス』とその映画は知っていましたが、この時、トマス・ハーディという作

家の作風やハーディの他の作品の存在を初めて知りました。

その後、京都府立大学大学院に進学し、ジェイムズ・ジョイスを研究しておられる浅井学先生のもとで英文学の研究を本格的に始めることになりました。修士課程で研究を始めるにあたり、フランス文学を専攻していた私は、まず初めに研究対象にすべき作家を決める必要がありました。そのため、浅井先生に「イギリス文学でゾラのような作家はいますか？」とお尋ねしたところ、先生はハーディとジョージ・エリオットを勧められました。しばらく考えた後、20代前半の私にはハーディ作品のヒロインの方がより魅力的に思え、ジョージ・エリオットではなく、ハーディを選択しました。

京都府立大学では野口祐子先生からもご指導いただき、修士論文で扱う作品として『日陰者ジュード』を選択しました。しかし、仏文科出身でそもそもヴィクトリア朝小説の英文に慣れていない上に、ハーディ独特の文体にもなかなかなじむことができず、かなり時間をかけて、作品を読み終わりました。さらにスー・プライドヘッドの「最後の転換」に焦点をあてて、修士論文を書き進めましたが、理解できたと思いうまく論考をまとめても、作品を読み返すたびに再考を迫られ、苦労した記憶が鮮明に残っています。しかし、同時に、もっとハーディ作品を理解したいという強い思いが湧いてきました。そして、京都府立大学の博士課程で勉強を続ける決心をしました。

博士課程では初期や中期のハーディ作品も読みましたが、やがて作品に描かれる家族のあり方に関心を抱くようになり、家族関係に見られる悲劇性に注目して、博士論文の執筆を始めました。その執筆にあたっては、博士課程在学時から所属させていただいている京都の「十九世紀英文学研究会」の福岡忠雄先生を初めとする諸先生方からも貴重なアドバイスをいただき、最終的に博士論文を完成させることができました。

このように数多くの先生方のご指導の下で、ハーディ研究を今日まで続けてきましたが、自分自身の人生の変化につれて、作品の思わぬ点に気づくことがあります。例えば、とかく悲劇的な内容が多いと評価されるハーディですが、その一方、彼の子どもによせるまなごしには驚かされるようになりました。先日、久しぶりに『日陰者ジュード』を読み返しましたが、冒頭のほんの数ページにのみ描かれているジュードの描写の精緻さに、これまでは気づきませんでした。思い切って自分の意見を言う時に真っ赤になるジュードの頬、フィロットソンとの別れに際し彼がこぼした涙、日没後、暗くなった周囲が急に怖くなり、大伯母のもとにあわてて駆け出すジュード、鳥に向かって「ごちそうしてあげるよ！（中略）可愛い鳥さんたち、たくさんお食べ！お腹いっぱいになるまでね！」と一心不乱にエサを与えるジュードのやさしさ等は、20代前半に初めて作品を読んだ時には深く心に留めなかった箇所です。もちろん、このような私の思いは「感傷」に過ぎないかもしれませんが。

『日陰者ジュード』には、物語の後半に「老人のような表情と感性」を持ったリトル・ファーマー・タイムが登場し、この陰鬱な子供の姿にこそ、作品研究の源泉があり、今後も研究者として注目し続けたいと思います。しかし、一人の読者としては、生き生きと描かれている子供の頃のジュードの姿にも強く心を奪われます。さらに、男性作家のハーディがこれほどまでに子どもの愛おしさを感じし、作中に描き出したことにも驚かされます。

今後の研究として、ハーディ作品だけでなく、彼と関係の深い作家の作品も考察してみたいと考えています。特に博士課程に在学中、野口祐子先生が授業で取り上げられ、精読したジョン・ファウルズの*The French Lieutenant's Woman*は、学生時代に十分に理解できなかったため、再読する必要があると痛感しています。日常の雑事に追われ、研究に十分な時間が取れない時期が、あと数年は続きそうです。しかし、その歩みが遅くても、細く長く研究を続け、論文を執筆して行きたいと思います。今後ともどうぞよろしくご指導ください。

《シンポジウム予告》

＜ハーディ＞をいかに教えるか

イントロダクション

渡 千鶴子

多くの大学では改組改編が進み、英文学の趨勢に翳りがあるのではないかとの危惧を感じる研究者が増えてきているようだ。日本英文学会では、ここ数年の間に、英文学をいかに英語・英文学教育に活かすのかといった議論が活発に行われている。そこでハーディ学会でも初めての試みではあるが、＜ハーディ＞と教育の関わりを探ってみることになった。

ハーディ独特の言語表現が言語感覚の錬磨に役立ち、精緻な読みによる作品の分析が、批判的な思考力や表現力の養成になることを、どうすれば学生は理解できるのだろうか。虚構の世界が我々の暮らしや文化や歴史を映しだしていることを、どうすれば学生に伝授できるのだろうか。私たちが研究しているハーディを有機的に教育に反映させ、ハーディの魅力を伝えるには、さまざまな創意工夫が必要であるように思われる。このシンポジウムでは、その教授法を模索しているパネリストの講義／授業を紹介する。この試行錯誤の実践報告をたたき台として、フロアーの皆さまから有益で忌憚のない活発な発言や質問を頂戴できれば幸いである。

オールドタイマーの弁明

福岡 忠雄

振り返ると、私はハーディ大会では既に数回シンポジウムに参加している。そのつど設定されたテーマに合わせるのに苦労したことを覚えているが、今回ほど困ったことはない。コーディネーターの渡さんから「英語教育法についてハーディと絡ませて」話をしてほしいとのこと。そもそも英語教育法などこれまで考えたことはなく、最近流行のパワーポイントの使い方さえいまだ知らない。その旨を渡さんに申し上げたのだが、「そんなに狭く考えずに、先生が大学で文学、あるいはハーディをどんな風に教授されたかを話してくださればいい」と言うことなので、少し気が楽になり「それでは」ということになった次第である。ただし、私の話はほとんど懺悔録に近いものになる予感がある。何しろ私が大学院生だったのはほとんど半世紀前。当時私が学んだ大学院は伝統的に訓詁の学、「ひたすら close reading に徹せよ」が唯一の「教育法」であったのだから。しかも、現在の私は「それが良かった」といまだに思っているのだから。まあ、オールドタイマーの私が頑迷固陋に伝統的教育法を墨守・弁護することで、他のお二人のパネリストのご努力・改善ぶりを引き立てる効果があればそれでいいかと思っている。

ハーディ作品を用いた授業風景

渡 千鶴子

福岡先生の close reading を受け継ぎ、西村さんの一般英語と文化論関係の授業への繋ぎの役割を担う。「あまりにも難しすぎるテキストでは、文学作品を読んで得られる喜びや成長を促すための正しい選択にはならない」との言を踏まえ、原書を容易には読めない学生のために編纂された二冊のテキスト（*The Return of the Native* の abridged版と retold版）を使用したリーディングの授業を紹介する。abridged版を使用した授業では、主に学生のモチベーションを上げる工夫や、学生を作品に惹きつける方法などを模索した風景を、retold版に関しては、編集されたテキストがいかに学生向きに改編されているかを提示する。授業方法は上記のテキストを用いた場合だけではなく、これまでの経験を交えた内容を織り込む。体系化された理論に基づいた英語教授法を、以前から意識的に展開していたわけではない。作品の英文読解に加え、内容把握のための設問をして、作品の背後にある時代背景・歴史・文化などに関する知識を授け、学生が作品をできるだけ深く理解できるように、また興味を持てるように努めただけである。決して計画的

であったわけではない。しかし伝統的な Grammar-Translation Method を変型した授業が、結果的には student-centered になっていたようである。

文化論的視点から行うハーディ作品の演習

西村美保

本発表は、文化論的視点から行ってきた自らのハーディ作品の演習を振り返り、反省点や今後の課題も含め、その内容を詳しく紹介するものである。私は文化論関係の授業と一般英語の授業を担当しているため、ハーディ作品を取り扱う場合、全回数をそれに充てるのではなく、大抵は、全体の一部として取り上げてきた。内容的には次の三つに分けられる。ハーディの詩の演習、小説の retold 版の演習、そして今年度初めての試みとなる小説における会話のロール・プレイである。詩については、ヴィクトリア朝の時代背景を説明する際に、取り上げる場合と、テーマを意識して英語の演習教材として取り上げる場合がある。小説の retold 版については、オックスフォードのグレイデッド・リーダーズから、*Far from the Madding Crowd* を一般英語の授業で使用したことがある。ロール・プレイについては、今年度前期、二つのクラスで、「家」をテーマとした授業において、三回程度をそれに充てた。ヴィクトリア朝の家の中で、どのような会話がなされていたのか、上級使用人と下級使用人ではどのような表象の差異があるのかを吟味するために、他の作家の小説からの抜粋とともに、*Far from the Madding Crowd* におけるバスバと侍女であるリディとの会話、トロイとファニー・ロビンとの会話を抜粋した。

《特別講演予告》

ヴァージニア・ウルフ、E. M. フォースターの 先駆者としてのハーディ

鶴飼信光

二十世紀前半のイギリスの作家たちの一部には、生命の力の主題へのこだわりが見られる。特に D. H. ローレンスに顕著だが、その主題へのこだわりはヴァージニア・ウルフ、E. M. フォースターの作品にも微妙に表れている。それ以前の文学作品ではあまり見られなかった生命の力への関心のこうした強まりの背景としては、キリスト教を生命の力を抑圧するものと見る思想の台頭や、機械文明の進展があると考えられるだろう。また、二十世紀の作家の間での共感による主題の共有もあるだろう。

本発表は、生命の力の主題への二十世紀のこだわりの先駆的な現れを、ハーディの特に『ダーバヴィル家のテス』に見ようとするものである。ウルフはハーディについて、『キャスタブリッジの町長』を高く評価しつつも『テス』には冷淡であったりするが、『テス』はウルフ、フォースターの重要な要素のいくつかを先取りする作品であると考えられる。ベシミズムと組になってではあるが、その作品に見られる生命の力の描写は、小説史の中でも注目されるべきものであり、その点を特にウルフの作品と比較しながら、考察してゆきたい。

『ハーディ研究』編集委員会からのお知らせ

『ハーディ研究』第41号（2015年秋刊行）掲載の書評本の推薦について

ハーディ関係の研究書、伝記などの書評を希望される会員は、一人1冊を限度に、下記の推薦規定を参考にして、書評推薦本の情報を編集委員会までお送りください。

1. 推薦締め切り：2014年10月26日（日）
2. 本 の 内 容：ハーディの研究書、伝記など。また、少なくとも一章をハーディにさいている研究書など。
3. 使 用 言 語：英語で書かれたもの、日本語で書かれたもの、どちらでも可。
4. 出 版 年：過去3年以内に出版されたものが原則であるが、5年以内のものでも認める場合もある。
5. 情 報 内 容：タイトル、著者名、出版社名、出版年、簡単な推薦理由。
6. 送 付 先：電子メールの場合 ykaneko@seinan-gu.ac.jp
郵送葉書の場合 〒814-8511 福岡市早良区西新 6-2-92
西南学院大学文学部英文学科 金子 幸男

*応募された書評推薦本は、編集委員会で吟味し、適切な書評者に11月末までに依頼します。詳細は、年末の「日本ハーディ協会からのお知らせ」に掲載します。

*書評推薦本に応募されても、取り上げられない場合もあります。ご了承ください。



《編集後記》

FIFA World Cup 2014 が6月12日から7月13日まで、ブラジルの12都市で開催されました。貧しさから這い上がるために、強いサッカー選手になる夢を抱いて、狭い路地でボールを蹴るブラジルの子供たちの瞳は輝いていました。大会では、伝統あるヨーロッパと圧倒的なエネルギーでぶつかっていく南米とが、熱戦を繰り広げました。最終的には、ドイツが4回目の優勝を勝ち取りましたが、サッカーファンにとっては、血潮を湧き立たせてくれた一ヶ月でした。

サッカーの世界大会が終わった途端に、今度は恐ろしい戦闘が始まりました。17日、イスラエル軍がパレスチナ自治区ガザに地上侵攻を始め、子供や市民が死亡、戦いが激化しています。

同日、紛争地ウクライナの上空で、アムステルダム発クアラルンプール行きマレーシア航空機が撃墜され、乗客乗員298人全員が死亡しました。相次ぐ大惨事に、いったい人類は、これからどこに向かっていくのだろうかかと暗澹たる気持ちになります。

今回は、前号に比べて紙面が少なくなりましたが、執筆者の皆様には、暑い最中に、誠心誠意をこめて原稿を書いて頂き、充実したニューズレターになりました。ご協力に心からお礼申し上げます。中央大学生協印刷部の藤様と清水様には、今回もご尽力を賜り、感謝しております。

次号は4月発行の予定です。原稿の締切日は2月20日です。論文、随筆は2000字程度、短信、個人消息は500字程度です。皆様、奮って原稿をお寄せください。尚、ハーディに関する著書、翻訳なども編集者までご連絡ください。お待ちしております。